

◎10:30 今から登り始める。今回のルートは初めてのルート。「面白いルート見つけた」と衣川さんが言うには、「登りが少し 荷があっても 大丈夫」「ならば 池で テント泊しよう」と計画。7時に茨木を出発、GWが始まり高速道路の渋滞があり時間をくったが、テント場まで荷が重くても3時間もあれば着くだろうと計算した。いつもの足谷山から登るのではなく、一つ手前を右に回って、横谷峠の林道に車を止めた。

◎風が冷たい、ひやりとする。三日ほど前から冬の寒さがぶり返し、シャツもタイツも重ね着をしている。先日来、真冬から、初夏の陽気になり、温かいを通り越して暑いと思ったが、またこの寒さである。冬のジャケットを羽織って歩いているが寒い、「ザックには ダウンがあるから まあいいや」つぶやきながら歩いた。

◎30分で一本取る。荷が重いときは30分で休憩を取るようにしている。急登が続いた、急登だと言っても二足歩行で登れる斜面だ。福井と滋賀の県境にある、高島トレイル、ここは福井県の気候、日本海の気候である。地面には桜の花びらが散らばっている、樹々の緑もこれから勢いが出てくる様子、まだ枝だけの樹も多い。

◎次の30分、さすがに暑くてジャケットを脱ぎ腰に巻いていた、ハアハア言いながらの登り、汗は出るが休憩で止まると冷たい風が当たるので、またジャケットを羽織った。「去年の GWの写真 もっと緑に 勢いがあった」という。木地山はしばらくご無沙汰していたが、衣川さんはこの山が好きでよく来るらしい。

◎この山は人が少ないがさすがにGWのさなか、10人ぐらいのランニングの若者、おっさんが一人追い抜かしていった。このあと帰るまでに何人の人と会うのかな。ランニング連を除いて、7人ぐらいと会った。

◎「あれれ 道がない」と迷ったが、大きく左折、大いに下る、10分ほどで見慣れた林道が見える。この高島トレイルのこのあたり、はなかなか魅力的な山だけれど、中途半端な林道が並行して走っているのには興ざめ。

◎ならば林道を歩こうかと歩き出したが、どうも様子がおかしい。左の尾根に向かって斜面を登り返す。

◎「おお敦賀湾かな」「大きな船かな」「いやあ 琵琶湖だよ」「あれは 島だ」この山は分水嶺の山。

◎12:30 T字路にやってきた。標識には池原山・足谷口と書いてある。いつもオレはここから登ってきていた。「さあ 昼飯にしよう」コンビニで弁当を買った、唐揚弁当500円也、久しぶりの肉である、美味しい。

◎話しながら歩くうちに、「お 池だ」「ええ もう 着いた」何度か見てきたあの池が下の方にある。水はうっすらある、中洲があり草と苔が生えている。先ほど歩いている時にカエルの卵を見た、水たまりの中、この水たまりはいつも水が溜まっているという、枯れない小さい水たまりにカエルの卵が所狭しと並んでいた。中西さんが〇〇カエルと言っていたがそいつなのか、そいつでないか、聞いてみなければと思いながら、気持ちの悪い卵の無数。ウニョウニョ連なったゼリー状に黒い点が見える、これを数えたらすごい数だろう、黒い点が目なのか、これが将来オタマジャクシになるのか、気持ちが悪いねと見ていた。指ぐらいの太さのゼラチン状の中に黒い玉タマが連なっている。この池では何度かモリアオガエルの白い綿あめに似た卵が、樹にぶら下がっているのを見たことがあるが季節は何時だったか忘れてしまった。

◎カナダで亡くなった写真家の星野道夫が、エスキモーの村の中に入り込んで、「彼らの食うものは 同じように 何でも食ったが ウジ虫だけは 食えなかった」といっていたという。「なんで こんな クリーミーな 美味しいものを」と現地の人は旨そうに食っていたそうだ。このカエルの卵、栄養満点だろうけれど、食べと言われたらいやだねえ、飢餓の極限状態になれば、食うかもねえ。

◎そんなことを録音しながら池の斜面を下っている時にスッテン尻もちをついてしまった。かかとで踏ん張りながら下っている時に、湿った粘土を踏んでしまった、ツルリンである。

◎そうだもうひとつ。先ほどカメラを落としてしまった、こんなことは初めてである。さいわい柔らかい土の上にレンズを下にして、ぼそり落ちた。レンズが奥の方にあるマクロレンズなので縁に土が付いただけで助かった。いつも使っているポシットをピッケルでひっかけ布が破れてしまった、そこからポトリ落ちてしまったのだ。ポシットを買い替え時だと思いつつまだ買っていない。ネットで調べると、山の道具とカメラの道具は高価なものが多いが、魚釣り道具のポシットは丈夫で大きくしかも防水が効いていると書かれている、後日これを購入しようと思っている。

◎池のあるところにテントを張った、重い荷を下ろし中のものを全部出した。「このあたりがいいかな」枝やら小石を取り除きテントを袋から出した。「こっちを入り口にしよう」と広げ、ポールを差し込む、二人でやればすぐに形になってしまう。敷物を置き、シラフマットを敷き、食料・水・調理用具・シラフ・ザックなどを中に入れた。「駒ヶ岳まで散歩」ということで歩きだした。

◎先日来、早く歩く山が続いたが、今日はのんびり山、「ケタイなものは ないかな」ときよろきよろ探し回った。立ち枯れた太い樹、崩れきった樹、枯葉の下、そんなこんなを探し回った。真っ黒いきのこ、真っ白いカビ、オレンジ色のかさぶた、そんなケタイなやつをいくつか発見した。土の中に何か白い石がいくつか、土を払ってみるとなんと、ギンリョウソウがまもなく立ち上がろうかというその白い色だった。「嬉しいやつに 出会えたギンリョウソウが見られた いいことがありますよう」と神頼みのあほづらである。

◎300Mで駒ヶ岳というところ、日本海が見える。この山に入って何本かの桜を見た、桜の花が咲いている、大阪に比べ半月ぐらい遅い開花なのかな。薄暗い緑に桜色の花、こぶしも咲いている、白アジサイも咲いている。

◎駒ヶ岳 780Mと標識に書いてある。磁石を見ると東と西に水面が見える、どちらが近いかというぐらいに同じように水が見える。西の方が若狭湾、東の方が琵琶湖である。光の加減なのか敦賀方面の小高い山の緑が、ポコリンポコリン緑の色を少しづつ見え、濃い緑、淡い緑、黄色っぽい緑、赤っぽい緑、それぞれが相まっておとぎの国がそこにあるようにポコリンポコリンである。

◎5:30 もはやいささか酔っている。テントを張り、駒ヶ岳まで散歩に行き、「ちょっと 時間が早いけれども さあ やりますか」と食事の用意を始めた。オレはウイスキー、衣川さんは日本酒を3合もってきている。オレは今回、食料係なので、乾きもの・かん詰め(サバとオイルサーデン)・茄子漬・ウイナー・菜っ葉の煮もの・酢レンコン、これらをちびりちびり、飲んではずまみ、つまんで飲んだ。いよいよ鍋にしようとコンロに火をつけた。エリンギ・しめじ・ネギ・うすあげを出汁で煮た。

◎池の対岸に人が来て、テントを二張はっていた。衣川さんが様子を見に行き、「地元のものだけど こんな冷たいのは はじめて」と40歳代の男女が言っていたとのこと、「鬱がだいぶ良くなったので 話もできた」とのたまう。オレは、わざわざ訪ねていくのが恥ずかしくてはばかられ、顔も見なかった。

◎朝5時、小便がしたくて目が覚めた、あとで聞くと昨日の就寝は9時前だそうで、まったく何も知らずに8時間ぐっすり寝たことになる。テントを出て靴を履くのだが、よれよれところびそうになった。日の出の朝陽がまっかっか、「おお これはきれい」カメラを取りに行っていくつか写した。そんな赤だったが5分ぐらいでなくなってしまった。鳥の声がやかましいぐらいに聞こえる。ちっちぱっぱ、ちゅ～ちゅ～ぴゃ～ぴゃ～。シカの声も何度か聞いた。

◎もう一の寝ようとシラフに潜り込んだが、うつらうつらして6時に起きだした。「飯は食えない」衣川さんが言うので、オレは一人で、インスタントラーメンとパンを食った。天気予報では今日は雨だというが、いつごろから降り出すのかはわからない。朝から空は曇り空、空気は湿った感じがする。

◎「さあ 帰り支度」テントをたたみ、ザックにパッキング。まずシート類をザックの背の部分に入れ、シラフを一番底に横向け、その上にテントを横向ける。このふたつでザックの半分ぐらいの量を使ってしまう。今回は使わなかったが、着替えの肌着や靴下、ダウン、ゴミを入れていく。水は下から担ぎ上げてきた、全部で4リットルを持って上がった。飲料水は1リットルしか使わなかった。水場があれば、ペしゃんこの水入れでいいが、下からだと、ペットボトルが必要だ、途中でザックの中で破れたら大変だ。

◎来るときに、「ええ こんなに下るのか」というところにやってきた。はっきりと道がついていない、これだろうと登っていくとだんだん細くなり、急な斜面と急な回転、これはけもの道だったのか、シカ君の道のようなのである、エンヤコラへ～へ～ぜ～ぜ～である。高島トレイルは上り下りが穏やかな道、ほとんどが尾根道で、二日三日かけ縦走しようという者にとって水の確保が難しい、水場が少ないようだ。木地峠の左右に水場があったような記憶があるが、何分ぐらい下ったのか、記憶は定かではない。

馬場あき子著<鬼の研究>

能に大会（だいえ）という題目がある。

◎あらすじ：昔々、ある寺で遊んでいた子どもたちが、怪しい光を見ました。都はみんな大騒ぎ。武術の達人にお願いをして、光に向かって気合をかけてもらおうと、落ちてきたのは一匹のトンビ。トンビは子どもたちに虐められますが、お寺の和尚さんに助けられました。実はこのトンビの正体はいたずら天狗。通常この部分は上演されないが、近年は狂言方によって行われる場合もある。この演目のなかに出てくる天狗と僧はこのふたりだ。

比叡山の庵室で読経をしている僧のもとへ一人の山伏（天狗）があらわれ、命を助けてもらったのでお礼をしたい。なんでも望みがあれば言ってくださいという。僧は、この世で望みはないが、ただ一つ、「釈迦が 靈鷲山で説法をしているところを拝みたい」という。「易いことだが 絶対に 尊いと 手を合わせたり してはいけない」と言って去った。天狗は釈迦に化けて現れ大会が演じられるが、僧はあまりの尊さに約束を忘れ、手を合わせて一心に祈る。途端にこれを見て帝釈天があらわれ天狗に、「仏法の冒涇だ」と怒った。天狗は釈迦の姿からもとに戻り、さんざんに懲らしめられ、ひれ伏して謝り命からがら岩窟に帰っていく。

◎先生：天狗について語ろうとするとき、いつも真っ先に思い出すのは<幻の大会>の話である。大会とは、釈迦が靈山で説法したときのことをいう。

◎この天狗は、「十訓抄」では「古鶯の世におそろしげなる」と書かれていて、相当に年功を経ている天狗を想像させるが、実際にはちょっとした油断から、天狗としては情けない鶯の姿のまま子供らに掴まってしまい、責めさいなまれるという、まずはたいした悪事も働けそうにない天狗である。

◎老僧に助けられた恩がえしのため<靈山の大会>を演出して見せることになった。「あなかしこ尊としと思すな。信だに発し給はば 己がため悪しからむ（絶対に手を合わしたりしてはだめだよ）」と念を入れる。

◎ところが、絶妙さにおいて本物以上に本物的感銘を与えた天狗芸術にうたれ、老僧はついに幻を宗教として渴仰してしまったのであり、ここに宗教に対する欺瞞罪が成立することになってしまった。

◎齢七十におよんだ老僧は、「西塔に住みける僧」と記されたままで、おそらく名もなく、貧しく平凡な一生を地道に仏道にささげて生きてきた法師であったのだろう。<略>彼は七十年の生涯においてはじめて荘厳華麗な儀式の中に身を置く陶醉を味わったのである。

◎関白藤原頼道は宇治平等院に鳳凰堂を建てた。<略>頼道は生きながら浄土を見る希いは達せられた。<略>浄土の幻を見ることを希った僧の求めは、頼道は生きながら浄土に棲むことを希った求めとくらべて、あるいはより切実であったかもしれない。<略>老僧の感涙と、鳳凰堂に坐した頼道の感涙とどれほどの隔たりがある。

◎観念世界にある仏法浄土の空無性を、一つの具象的世界として存在させようとする事への揶揄であるともいえる。天狗は荘厳儀式を侮辱することで、貴族仏教への痛烈な批判をしている。

◎先生：天狗が一方的に処罰されなければならないのはどうも片手落ちである。演技による大会は決して宗教の場ではない、というこのことを見抜けなかった過失は、むしろ老僧の方にある。<略>宗教に対する冒涇罪が最高の罪悪とみなされていた時代と、現代にある倫理観のずれと結論付けてもよいものだろうか。

◎先生：もうひとつ、芸術というジャンルは、ことに古い時代においては、つねにある種の権威や権力、ないしは経済力にたいして、奉仕的に、あるいは付随的にしか発展できなかったのであるが、この話には、初めて天狗という超人力をもった外道によって、芸術が対等に宗教に挑み、敢闘した姿が見られる。

この話、いたく気に入りました。「能の大会」このあらすじを読む限り、「なんだ そういう話か」で終わっていたのですが、「本当に天狗が悪いのか 騙された老僧が悪いのか」ということ。「当時の仏教が貴族だけのもの 仏教行事が荘厳華麗な空間でしか行われていなかったこと」 仏教が庶民の間にまではびこっていない時代のキンピカ仏教の話かな。“天狗”も“鬼”もわき役でがんばってますね。

◎GWのさなか、今年は10連休とにぎにぎしい。「いつが休みで どこが休みじゃ」という日々のオレには、どの日が何の日やら、明日が何の日やら、「ま どちらでもいいか」となげやりである。

◎岡村車で、阪急茨木駅に7時、「献血の付近だよ」と集合。番匠・操・岡村の3名。ナビに“みつえ青少年旅行村”と入れた。いまだに地図を見ているがこのあたりの土地の感覚がもうひとつピンとこない、吉野やら東吉野はある程度わかるのだが、曾爾村・御杖村・室生寺・赤目四十八滝などの場所がはっきりしない、「もう少し 通わなければ いけないよ」ということかな。それよりもICレコーダーを忘れてきた、これがなければ歩きながらの実況中継ができない。慌て車の中から筆記用具をみつুকろった、今回は手書きのメモである。

◎9時過ぎに駐車場に到着、さすがにGW、旅行村の中はおおいに賑わっている、車も多い。来るのは冬季が多かったこともあって、賑わいは初めて見た、いつも閑散としたさびしい場所の印象しかなかった。

◎9:30歩き始めた。操さん、「膝の調子が最悪なので 迷惑をかけては いけないし・・・」というので、「なら、エスケープルート」まず30分で登って来られる展望台の建物で待ってもらおう。つぎにダメになれば、1時間半で登ってこられる避難小屋で待ってもらおう、というコースで登り始めた。このふたつの建物、テント無しでもなんとか泊まれる、下の展望台など快適だろうなと思いつついまだ利用はしていない。

◎このあたりは近畿の南の方、山深い場所とはいえ、先日行った高島トレイルとは温度差がだいぶ違うのか、樹々の緑が濃い、若葉時代が過ぎ緑がだいぶ濃くなっている。とはいえ、山のあちこちで桜の花びらが土の上に落ちているのを見た、まだ桜が散ってそうは時間が経っていないということかな。

◎12:00 避難小屋を出発、山頂までもうすぐ、目的の八丁平もそのあとすぐ、そこで昼めしを食おうと歩き出した。この小屋のそばに異様に枝分かれしたブナの木がある、立派なやつだ。

◎尾根道にやってきた、標高が1000Mを少し出たぐらいの高さだけれど、風がきついのかひよろひよろ細く背の低い樹がいく本も茂っている。すぐにでも炭を作れそうな大きさだ。

◎三峰山 1235M。「ええ そんなに低いの」「そらあ このあたりの山は 弥山の八経ヶ岳でも 1915Mだよ」頂上の大きな標識に室生火山群の看板。調べると、1500 万年前、何度かの大噴火があったらしい。このあたりの凸凹地形は火山活動とその後の河川浸食でできあがったが、信州のアルプスは、大陸の衝突による隆起と、氷河による浸食でできたようだ。

◎三峰山頂上から見下ろせる村は奈良県側、御杖・曾爾の村。尾根の反対側、八丁平から見下ろせる村は三重県側、飯高町。山からの川がぐにゅぐにゅ蛇行し、その曲線に沿って狭い平地に家々が、そして田畑がならび、両側とも同じような眺めになっている。「あれれ さっきの村？」と錯覚しそうなよく似た村の姿だ。

◎オレは今朝用にご飯を炊いたので、いつものおにぎり野菜と卵焼き。番匠さんは食パン・焼き豚・トマト・チーズを持参、特製豪華サンドイッチを作っている、オレもそれをいただいた。操さんは助六寿司。果物ゼリーのカップを食い、湯を沸かしてコーヒーを淹れた。

◎高島トレイルのしっとりとした尾根道に比べ、台高の尾根道はその姿が大胆に感じられる。太平洋側と日本海側の違いか、この違いは何だろうと思いつつも、頂上付近の平らなポコリン地形を楽しんだ。

◎「膝に爆弾を抱えて」というがなんとか上までやってこられた。1時間ほどゆっくりの休憩、「ならば 膝にやさしい道かな 大きく 時計回りに下ろう」と尾根道を西に進んだ。空気はよほど快晴日和、まわりの山々も見えるには見えるが、なんだかぼやけているが、空気はからりと乾燥している。樹々も草も、落ち葉も土もなんとなく乾いている、乾いていることに文句を言うわけではないが、湿っている方が生きものたちの蠢きを感じられるのかな、とわがままな感想。

◎この尾根道をまっすぐ行くと高見山に向かうようだ。左は三重県、飯高方面、右は車がある御杖村だ。

◎林道まで下ってきた。「これなら 膝も 大丈夫かな」と思っていたが、林道途中ぐらいから彼女のペースが落ち始めた。「ひとつぱしり 車を とってくる」番匠さんが得意の駆け足、「ちょっと距離があった」と30分ぐらいで車に乗って帰ってきてくれた。今年の冬は来られなかったのが残念。「霧氷が見られなかった」

## 馬場あき子著&lt;鬼の研究&gt;

前回の<大会-だいえ>に続きである。同じように、能の<求塚>と<黒塚>の話。残念ながら舞台も動画も見えていない、あらすじを読んで、先生の話を読んで、「見てきたよううそを言い」なのかも知れないが続けます。歌人であり古典に詳しく、能の話に詳しい方、その語彙や単語は、「オレの倍以上に知っておられる」と驚きながら、きれいな文章が綴られていくのは読んでいて心地いい。先生が女ゆえなのか、そういう感性の人なのかはわからない。能という動きの少ない舞台、面をかぶった舞台、場面の隅々まで感性を研ぎすましての話。女が鬼になっていく、小面（美しく微笑んだ女）と般若（怒り、恨みを背負った面）は紙一重なのかもしれない。

## &lt;求塚 もとめづか&gt;

あらすじ：早春のある日、僧の一行が生田の郷に（摂津国神戸の生田神社付近）やってきた。菜摘みの女たちがあらわれる。僧が、<求塚>の名を出すと女たちは帰ってしまう。ところが一人だけ残り、僧を求塚に案内する。この塚は二人の男の板挟みとなり入水自殺した菟名日処女（うないおとめ）の墓であった。女は処女の身の上を語って消え、僧は吊り始めた。地獄の苦患に憔悴した処女の亡霊があらわれた。地獄の炎に焼き尽くされ責め苛まれる処女、仏法の力によって業火の煙を晴らし、闇夜に消えていく。

裏話：「大和物語」に描かれている伝承をもとに描かれている。乙女は二人の男に求婚された。「あの生田川に居るオシドリを射た方と契ります」二人の男の矢は同時にオシドリに命中します。おとめは自分の業の深さを嘆き入水する。二人の男は、「乙女がいないのなら」と刺し違えて後を追う。

◎先生：小面のかげには般若が眠っているのだと考えている。美少女の処女が二人の男から求愛され、池のオシドリを射ることに恋を賭けよと命じる。同時にあつた矢でオシドリの血汐が池を染めた。その話を語る処女の小面は回想に瞳を曇らせながら池を見つめている。その口許がほのかな微笑みをたたえていた。二人の男の愛をはかる遊びに、オシドリの命を賭けた少女らしい無慙な心驕りを、この日の小面がチラとのぞかせた。

## &lt;黒塚&gt;

あらすじ：山伏一行が奥州安達ヶ原（福島県）に着いたころには日が暮れ、近くの庵に宿を願った。庵に住む女は一行を不憫に思い泊めてやる。賤しい女は、山伏たちに、仏心もない過去を悔み、人生の虚しさを嘆き、彼らのために暖をとる薪を取に行く。「けっして 寝室を覗かぬよう」言われた山伏が中を覗くと人の死骸が積まれていた。女の正体は鬼であった。一行は逃げ、女はあとを追ったが、山伏の験力で調伏され消えていく。

◎みちのくの 安達ヶ原の 黒塚に 鬼こもれりと きくはまことか

◎先生：夜半、禁を破って閨をのぞくと、内は山積みする屍体と膿血腐乱の悪臭にみちみちていた。女主人公が鬼の本性をあらわしたのは、「あさましや 恥ずかし 我が姿や」と謡われていて、膿血流れる閨の内をあらわにされたことに、ふいにもどってきた女の羞恥から鬼となったことが理解される。鬼が女となって旅人の足を止め、命を奪うというのではなく、女が閨を見られ、怒って鬼に戻ったということだ。

◎「げに詫び人の習いほど、悲しきものはよも有らじ。かかる憂き世に秋の来て、朝げの風は身に沁めども、胸を休むることもなく、昨日も空しく暮れぬれば、まどろむ夜半ぞ涙なる。あら定めなの生涯やな」

◎せんせい：南北朝内乱と、戦乱に付帯する棄民流浪の悲劇が随所に見られたであろう。落魄憔悴した女主人公が、「かほど、夢（はかな）き夢の世を、などや厭わざる我ながら、徒（あだ）なる心こそ恨みても甲斐なかりけれ」傷つけ、傷つけられた女の情念の贅（にえ）である。中世という過酷な時代にいたって、はじめて誕生した女の鬼は、ある夜、ある時、絶望に冷え錆びた情念をかき立てつつ、とてつもなく美しい言葉を噛みしめ謡う。

◎アフリカの国を追われ地中海を渡ってEUに逃げのびる難民の話は画像で見る。それこそ命からがらの逃避行、難民を拒否する国々、難民の、ひとりひとりの気持ちを、話を聞いてみたい。

10 連休というGWが終わって何日か経った。今日は馬鹿陽気、30 度を超えたとか越えなかったとか、夏の温度だが、2.3 日前は寒くてダウンの上着を着ていた。さすがに外出時は格好が悪いと薄着をして出たが、家の中にいると冷え、ダウンを羽織らないと頭が痛くなってきそうだった。

思い起こせば毎年のことなんだが、3 月のまだ寒いころからぼちぼち花が咲き始めた。日を追っているいろいろな花が咲きだした。安威川の河原、今までの冬の景色、枯れ草と濃い緑のすきまから、若草色の緑が心細げに顔を出し、ひよろり上に伸び、上の方、樹々の新芽が膨み、なんてなことをぼおっと思っていると、一足飛びに草が伸び花が咲きだした。黄色い菜の花が緑を覆い隠すように一面に広がったかと思うと消え、今は種になっている。赤い花、白い花、ピンクの花、をつけた樹が、「おおすごい・・・」と満開の盛りを誇って消えた。今は膝ぐらいに伸びた草むらに、白やピンクや黄色の小さい花が満開の状態、これもまたそのうち消えてしまうのだろう。花というのは次から次へと、手を変え品を変えではないけれど、どんどん選手が交代していくようだ。

雨が少ないこの頃、安威川の水は透明に静かに流れている。30 センチぐらいの深さかな、下がまる見えだけれど、魚の姿は見えない。鯉の交尾シーズンなのか、もう少し上の方ででかい鯉たちが顔を上流に向けて大集合していた。交尾は夜になさるのか、昼の今は静かにじっとしているが、夜走っていると、時々、バシャバシャ大きな音を出して暴れている、「おれに たねつけ させろ」とおっしゃっているさまだね。白いサギ、青いサギがふらり飛び上がったたり、川の中に立っていたり、カラスと鳩も舞っている、鶺鴒もカモ君もいる。

先日、お天気の話、晴れの話をしていた。調べると、快晴は雲の量が 10%以下、晴れは雲の量が 80%以下、曇りは雲の量が 90%以上、と気象庁で定義付けされているようだ。今日は薄く刷いたような透明感のある白い雲が 20~30%ぐらいある、モクモクとうしろの色が全く感じさせないような白さの雲ではない。空は真っ青、オレの定義では快晴だけれど、これはただの晴れというんだろうね。飛行機も 2.3 機見た。風が騒ぐ、草がそよぐ、樹の葉や枝が揺れる。ぴゅーとか、ぴゅ〜んとか、すごい音も夜に聞いた気がする。

今、絵の修繕をしている。去年の夏にアトリエを留守にして、多分河原に行っていたその時、大雨が降った。一天にわかに搔き曇り（この言葉の漢字再発見 搔きは=背中を搔くという漢字）河原からの帰途ずぶ濡れになった。年に 1.2 回こういうことがある、「どうせ 汗をかき 濡れるのだから 同じことだ」とはいうものの、全身ずぶ濡れで、ドアの外で靴を靴下を取ってやおら室内へということになる。最近では天気予報の精度が上がり、ネットの何時ごろから降り出す、晴れだす、というような情報がおおよそ外れないが、「帰るまでは なんとか 天気もつだろう」と考えてしまった。開け放した窓から土砂降りの雨が降り込み、棚の上に水溜りができていた。少し前に描いた絵をキャンバスの布だけに巻いておいていたところに水が溜まっていた。

この 1 か月、去年 6 月の“ふらふらペインティングの旅北海道Ⅱ”の絵を修繕していた。たった十日ほどの旅、10 号サイズのタブローと水彩を何枚か描いた。帰ってすぐに絵を広げ、さわる気にはならなかった、ほとんど 1 年足らずそのままにほっていた。気にいった絵が描けなかった、いいものができなかった、見る気にもなれなかったということですね。北海道でも描きながら、「アトリエの中での 新鮮な感覚が 発揮できない あかんね」と思いながら描いていた。それらの絵を広げ、あれやこれや考えながらも何日か見るだけで終わっていた、「どう攻めればいいのか わからなかった」という状態から、毎日ちょっとずつ手を入れていった、サインを入れるまでに 1 月近くもかかった。

北海道の絵の修繕が終わって、3 月の展覧会以降、多少大きな絵が数点完成した。久しぶりの快感に酔っていたが、横に積んである雨で汚れた絵を思い立って修繕しようと広げた。絵は 2014 年の 20 号が 2 点、キャンバスの白い部分に棚の材木から浮き出た茶色い灰汁が、波模様、雲竜模様に広がっていた。汚れの上にキャンバス色を塗ればと試みたが、汚れはおいそれと取れない、それを 3.4 回試した。「汚れが取れないなら ええい 同じ汚れ模様を 他の所にも 作ってみては」と筆で描き入れ、また同じように、薄いクリーム色を薄く何度か入れてみた。「ま なんとか ごまかせた 修繕できた」と筆をおいた。

安威川河原、今、この季節、小さいが花盛り。大きくても直径3センチ、小さいのは1センチ、その半分ぐらいのもの、もっと小さいものもあるのだろうが・・・。色は黄色、紫色、形状も様々、紫系の花が多い、白に近い紫、青に近い紫、赤に近い紫、濃い紫、爽やかな紫、この爽やかという表現は色のプロらしくない表現と反省しながらも、じゃあどういふかと自身で反論しながら笑ってしまう。紫という色、花の色としては多いのだとあらためて驚く。草の葉っぱの緑は濃い緑と淡い緑、これは緑色に青色を混ぜていけば濃い緑色に、緑色に黄色を混ぜていけば淡い緑色に、とまあ、こうは単純ではないのだけれど、邪魔くさいのでこの辺にしておく。緑の草が膝ぐらいまで生い茂り、その中に花々が隙間すきまに咲いている。思えば、いつもいつも花が咲いているわけではない、この季節は雑草君たちが花盛りになる季節なのかもしれない。一か月ぐらい前には、からし菜の黄色が一面に咲き誇っていた、そのからし菜の先っぽが黄色い花から今は豆状の実になっている。

先日の展覧会に、学校の絵の先生をやっている方が、「描きそんじの絵は どうするの」と聞いてこられた。オレの展覧会、絵と関係ない人が多く来てくれる、これはうれしいことだけれど、話がすぐに絵から離れ、社会問題、時事問題なんてすぐに終わり、かつてお互い、同じ環境で同じ飯を食ったとか、今はこんな身体の状態だと老化の話が多い。そんな中で、絵の話を真剣にさせていただくと、渡りに船と喜んでべらべら絵の話をしてしまう。「描きそんじ うまくいかない」こんなことは毎日の悩み、凡才芸術家がだかえる、誰もが悩む大問題なのだ。最初の出だしで、「これはうまくいく」というヤツはたまにある、そういうヤツはたいがいの場合、次の手も、その次の手も、的をえてすんなりいい感じに仕上がっていく。そんな上手い話はめったにない、数少ない。それこそ、「あちゃ～ の連続 ため息の連続 しつこく攻めて もううまくいかないですよ」クリヤーという言葉があるが、真っ白いキャンバスが、何度も何度も真っ白い状態に戻ってくれば、なんとありがたいと思う反面、そういう技術的解決はよくないだろうと思っている。CGという言葉がある、コンピューターグラフィックの略だけれど、これこそ、「ああ 失敗 やり直し」とまた最初から始められるが、オレはこの話にはなじめない。

先日友人宅でお酒をごちそうになった。六甲アイランドへ初めて行った。どう行けばいいかとネットで検索すると、阪急茨木駅から梅田に出て、阪神電車に乗り換え魚崎駅まで行く。そこで六甲ライナーに乗って六甲アイランド北口で降りて行くのが一番いいとでた。電車賃は計800円、乗車時間が1時間ぐらいだ。

六甲ライナーに乗って前方を見ると、大きな海の上を飛び越えていく、これはなかなか壮観だと喜んでいたが、普通のモノレールとはちょっと違う。オレが普通というのもおかしいが、いつも目にする、近所を走っているものはコンクリートの太いレールを跨いでいるのに比べ、ここのは太い二本のレールの上を走っている、「あれれ」と駅で降りてその下の部分を観察したら、タイヤが両側に自動車のようについている。「これも モノレールか」と調べてみた。酒をごちそうになった友人は、「あれは モノレール」と言っていた。

「えええ 無人運転」前の方に運転手がいたように思ったが、無人だと書いてある。タイヤはゴム製でパンクがしにくいと書いてある。いやあこれは驚きだ、とばかりも言っておられない、確か大阪の南港を走るニュートラムが無人だったとか、有人だったとか、事故があったとか、そんな気がした。

いろいろ調べてやっと判明、神戸のポートライナー、大阪のニュートラム、それぞれ同じ考え方、モノレールではなく、“自動案内軌条旅客輸送システム：AGT”というらしい。

これが判明するまでに、モノレールについていろいろ検索すると、“懸垂式”と“跨座式”があるらしい。懸垂式とは構造物の下にぶら下がって箱が走る形式だそうで、これには乗ったことが無いが、なかなか爽快だろうと想像できるが、いささか恐いかも。

だいの大人が、しかもオジンが、走る前方を見つめ、海だ、山だ、レールだ、と興奮するのは男の特権なのか、男の馬鹿なのか。乗りながら、このシステムはなんだ、レールはないのか、車輪はタイヤなのか、運転手がないのか、今はやりの車の自動運転が何十年も前にできていたのか、とつまらんことに興奮してしまった。

◎今日の山は檜塚奥峰、ここは何度か来ているお気に入りの場所、いつもの東吉野からではなく、県境のトンネルを越え飯高あたりを右折、栃谷を越え千秋（せんしゅう）林道終点まで車を取り入れた。途中の空がきれい、青空に白い模様の雲が右に左に広がる、「ひんがしの のにかけろうの たつみえて かえりみすれば つきかたぶきぬ <柿本人麻呂>」なんて洒落ながら車を走らせた。6:30 出発、9時に着いた。

◎9:10 林道に通行止めのチェーンがはってある、それを越えて歩きだす。すぐに湧水が出ているが、まだ乾きもなく、ザックには 1.5Lの水がある。横の川の水音がすごい、少し前に大雨が降ったのか、関西も大雨情報が出ていたが、大阪は小雨が降ったぐらいだった。川の水がゴゴゴと流れている、すごい水量だ。すぐに左手に檜塚が見える、ポコリンと見える、絶壁が見える。

◎30分ぐらいで登山口。「シロヤシオの花を見たい」調べると白いつつじの木だ。遠目からは白いアジサイも、白いつつじも区別がつかない、先日の三峰山にも白い花があったが、アジサイとばかり思っていたが、つつじだったかも。故澤山さんが、「フクジュソウを見に行く」とか「これが ○○○という花」なんて山の中で説明してくれていたが、「ふんふん」とうなずくだけで興味を示さなかった。オレは山を登って楽しむだけ。花鳥を愛でて、名前を覚えなければと思うが、花鳥、草木、名を知らない、名を聞いてもすぐに忘れる、いたく反省なり。

◎すぐに山仕事用の小屋がある、扉はないが休憩か避難には使わせてもらえそう。まっすぐ上るのではなく、道なき尾根を登ると、シロヤシオがあるという。どこの山もそうだけれど、下草が綺麗に刈り込まれている、土の上に樹の幹が直にニョキ生える、なんだか涼しげな、絵に描いたような森の姿だけれど、これは日本では不思議な姿、よくない姿、草が育たないらしい、鹿が全部食ってしまうらしい。

◎ヤマシャクヤクの花、真っ白いつぼみ、今日の昼には開くかなという感じ、残念だと思ったが、帰って花の画像を見ると中に大きく黄色の雌しべがでっかくあぐらをかいている。「これは もうひとつ この黄色は大きすぎる せっかくの白が だいなし」失礼だけれど、白いピンポン玉状態がいい、今の蕾状態がいい。バンケイツウの緑、トリカブトの緑、土の上に所々草が茂っている、山の上はまだ冬の雪が融け、やっと草が芽吹いてきたという季節、これらは鹿も食わないらしい。20年30年前の山は、草をかき分け、藪をかき分け、笹をかき分け登っていたように思うが、様子が変わってきている。

◎シャクナゲの花、この花は好きな花だったが、今あらためて見るとさほど感激もない。えらそうなことを言って自然界に、山の花に、失礼だけれど、「オレのアトリエの 絵具の ヒト塗りが フタ塗りが どれだけきれいか」とつい口が滑ってしまった。「ねっとり 粘度のある 絵の具を ナイフで擦りつけ 軽く刷毛で 刷くもよし」「そんな絵の具を 太い筆につけ キャンバスに ごしごし 擦り付けるもよし」「水っぽく しゃぶしゃぶにし 白いキャンバスに たら〜り 垂らすもよし」である。花々も見るタイミング、季節、気候が関係するのか、大峰奥駈道で早朝の霧の中で見たシャクナゲには感動した。朝の湿った冷気の中、向こうに幽かに淡いピンク色が浮かんで見えた、近づくとシャクナゲだった、気持ちが震えた。

◎巨木はいいねえ、いつでもでっかい樹を見るとおおいに心揺さぶられる、大地を感じる。目の前にミズナラのでっかい樹、反対側に回ると中が空洞、小象ならすっぽり入るような大きさの洞だ。山に入ると、「え なんてこんなところに」というような巨木を見ることがある、「やあ」である。

◎12:00 檜塚に登りついた。道なき道よじ登り、二足歩行で歩けるところ、ここでは枝や幹を手づかみ腕力で身体を押上、ここでは枝の下を何とか潜り抜け、ここは岩をつかんで四つん這いに上り、ここでは右にカーブ左にカーブでジグザグ登る。ふーふーは一は一、やっと乗越にとりついた、登山道に出た、と喜んだら横に檜塚の標識があった。この急な斜面では、カメラもICレコーダーも取りだす余裕がない、花が、巨木が、ケタイなヤツが、こけがキノコが、と横目で見ながら登った。

◎飯は檜塚奥峰でということに登ってきた。標識には 1420Mと書いてある。このあたりの景色はいつ来てもいい感じ、お気に入りの場所である。右も左もポコリンとなだらかな山が続き、鹿のおかげとはいうまいけれど、下草がほとんど食いつくされ、草刈りをしたような山肌に風で歪んだひよろひよろの木が右向き左向き立っている。

◎草の上に座ったのが失敗、乾いていると思った草の上だけれど、ズボンのけつを濡らしてしまった、膝を立ててそこも濡らしてしまった。ザックにはシートをもっていたが出し渋った邪魔くささが仇になった。

◎「おおお カッコー 初めて見た」ハトより小さくスマート、薄茶色、グレー色、「カッコー カッコー」鳴いている。「やや 二羽いる」どうも繁殖期ようだ、盛んに鳴いて二羽で飛んで行った。

◎帰りは南に向かってぐるり一周散歩をして帰ることになった。少し鞍部を下って向いのポコリンを登り返す、このポコリン、樹も草もなく、人呼んで、劇場というらしい。芝居でもコンサートでもできそうな雰囲気、うまく名付けたものだ。鞍部には水が湧き小川が流れている、さすが湧水は美味しい、絶好のテント場なり。

◎途中休憩をして、果物入りゼリーを食べた。ザックの中に入っているのが冷たくはないが、汗をかいている行動中にこれを食べると美味しい。薬屋で売っている栄養ドリンク入りゼリーも山にはいい。

◎何度もういけれど、ここは本当に気持ちのいい場所、タラリン、ポコリン、まったくした台地、人がほとんど入ってこない、太い倒木があちにもこちにも不思議な光景。ブナはまだ葉が少ししか茂っていないこれから状態、一方カエデは青々と盛んである。

◎2:30 さあいよいよここから下り、まずは斜面を一步一步ズルリとずれながら下っていく、下に樹はあるところを選んで足を進める、もし転んでも樹にぶつかり下まで行かないからである。ずるりズルリ。いよいよ斜度がきつくなり、谷が見えてきた、水が流れ出している、岩がある。いつも言っているけれど、山が大好きなオレだけれど、怖がりの高所恐怖症、山に入っている人たちの中では、恐怖度が大きい方だろう。そんなたちなので危険な場所には近寄らない、危険な場所は遠回りしても巻き道を探す努力をする。いよいよ谷筋を少し下らなければならない、緊張しながら岩の割れ目を探して手でつかんで、そろり一歩、次の一歩、何とか下った。「70歳を過ぎて 道なき道を 歩くのは やめたほうが いいねえ」とは述懐である。

◎過去にも、ここを通過しないと帰れない、巻き道はない、というところが何度もあった、落ちたら多少の怪我ではすまないというところだった。危険なところは近づかないに限るねえ。

◎やっと二足歩行の安全な場所に降り立った。恐怖の10分20分であった。なんとシオジの巨木、こいつにも洞がある、午前に見た小象より少し小さい洞だが、樹の大きさはこちらの方が大きいかも知れない。

◎5:10 車のところまで帰ってきた。9:10に出発したのだから、ちょうど7時間の山行。危険度は大きかったが、疲労度は中ぐらいである。

◎靴を変えて運動靴に、汗はあまり出なかったのもそのままジャンパーを着た。コーヒーとどら焼きを食べた。ここ何回かの山、腹が減ってはなんとやらで、多い目のおにぎり、パンなどをザックに入れている。歩きながら小さく切ったパンを口に含み歩いているとこれがまた美味しく、腹も減ってこないし快適である。水分は1.5Lもって上がったが、下山時に少し余るぐらいかなという量だった。暑くもなく寒くもなく最適な気候だった。

◎檜塚奥峰は何度か来ている、ほとんどが、東吉野村を通り、ソーメンの榊井君の家の前を通り、大又川沿いに終点まで走る。檜塚奥峰へは、明神平から足を延ばしてやってくるが、時間のかげんで奥峰あたりをふらふらす時間はない。今日のふらふら奥峰探索は快適な時間でした。

◎檜塚 1402Mと檜塚奥峰 1420Mの関係がよくわからないが、三重県飯高あたりから見た絶壁が檜塚、奥峰はその奥にあるということかな。いずれにしてもこの日、まったくどなたとも出会わない、これはめずらしい。

◎今回登山道ではなく、地元の人がよく知っている、尾根やら谷やらを利用して歩いた、鹿の道、いわゆるけもの道もおおいに歩いた。けもの道も多い鹿のおかげでくっきり道がついているが、奴らの運動能力、急に旋回やら、すごい斜度が突然現れ、これはいけないと引き返すこともある。

◎木材乾留く広葉樹材木を釜に入れ外部から熱する。木ガス、タール、木酢が取れ、最後に木炭が残るこの山域は戦前の鈴木商店(財閥)の所有で、かつて木材乾留が行われていたという。縦横に走る、今は崩れが目立つ狭い林道も、かつて、人が歩き、牛馬が歩き、山の恵みを活用していた様が見て取れる。そんな姿も、プロパンガスが出始めた昭和30年代からだんだんすたれていったのではないのかな。

上原栄子著<辻の花ーくるわのおんなたち>1914年生まれ(大正3年-オレの父親と同年なり)

「ああ この本は 以前にも読んだ」と思いつつ思い出せない、当ブログにも書いたような気がするがまったく忘れてる。加齢により健忘症が進んでいるのだろう、何事も右から左へ飛んでいくことが多い、この情けない現象を反対に解釈して、「何事も 日々 新鮮だと」思えばそれでいいのじゃないのかな。

沖縄にあったくるわに実際に暮らしていた女性の話、彼女の思い出話、こんな貴重な文章はない、多少着飾ってあるにしても実話の迫力はすごい、引き込まれて読んだ。紹介の前にこの沖縄の遊郭の制度が聞き知っているものとずいぶん違い、「私は 幸せだった」という雰囲気という言葉が漏れ聞こえそうで、読みながらほっとする。

◎沖縄の人々は、沖縄の遊女は、唐世・大和世・アメリカ世・日本世(世はユーと読む)と世変わりを経験して、そのたびにある三国の旦那様を持つ体験をさせられてきました。沖縄に生まれた私たちは、踏まれ、焼きだされ、なおたくましく生きてきました。古代琉球より受け継いできた命の中に、何かが燃えている、何かが秘められている、といった感じです。

◎私は4歳の時、辻という遊郭に売られ、そこで育ちました。母の病氣治療費に困り果てた父に、子豚か子山羊のようにモッコで担がれ尾類(ジュリ-芸娼妓)の卵として連れてこられました。「仲介人も通さず 我が子を モッコに入れて 売りに来るとは」と驚いた抱親様(アンマー-女楼主人)が話をしました。極貧の親子を見て、「二十円」という破格の金額が決まり、昨夜の客の残り物料理だが、水飲み百姓の父にとっては、目も見張るような御馳走がふるまわれ、私を残して帰って行きました。

◎おねしょはするし、風はわいている、腹ばかり膨れいかにも貧乏と不潔の標本みたいな私は、大きくなっても売り物に出せるシロモノと思えなかったに違いありません。これまで飢えの毎日だったので大変な餓鬼猫で、盛られたお椀に両手を突っ込み、食べ終わらないうちにまたほかのものをつかんで口に放り込んでいたらしい。

◎水飲み百姓は、白いご飯どころか、まともな芋も市場に出し、親指ほどの芋とみそ汁、病気の時でも粥に塩と豚の脂を浮かせるのがやっとでした。そんな貧乏な百姓にとって、最も手早い金策は我が子を売ることでした。男の児なら漁夫として売られて行きました。

◎“辻三千の美妓”16世紀ころに始まったと言われる遊郭です。辻の300軒もある各楼は、抱親(アンマー)と言われる女営業主が、2~5人の芸妓を抱え経営されていました。抱親は一人の旦那様を守る女でした。

◎遊郭ですから、人身売買や買春の男たちの出入りは事実ですが、アンマーは抱妓(カカエゴ)に客を取らせ、搾取しようとは考えず、カカエゴたちの立身出世に心をくだき、我が子のように慈しみ育てることに努力していました。アンマーたちの事業手腕の見せ所は、自分一人が大金持ちになるよりも、カカエゴが一日も早く身代金を払い終わって、自分と同じように、カカエゴを持つ辻のアンマーとして暖簾分けできることを願っていました。

◎これを記し始めて、やがて筆を置こうとしたある夜、ふと自分を振り返って、私は幸せな女だったということ、そして男女の縁という者の不思議さを改めて思い知り、びっくりいたしました。初夜の男、初恋の男、我が持てるいっさいのものを捨てて肉体におぼれた男、好きでも嫌いでもなく金でわが身を売りつけた男、そして最後に激しい愛情を寄せたのでもなく、なんとなくなるようになって自然に持った夫、今はいまみんなが灰になってしまいました。「生涯で 一番好きな男を 目の前に 出してやる」と言われたら、あれほど惚れた初恋の男ではなく、女体開発されて身を黒焦げに焼け尽くすかと思われるほど激しく燃えさせてくれた男でもなく、淡々と平凡に欲も得も無く成り行き任せに夫婦になった夫でございます。

◎沖縄の遊郭に、その組織、制度、習慣を作ったのは、旧王朝時代に支那より琉球王府に遣わされた冊封使、薩摩の役人とかの接待またはお相手をする尾類(ジュリ-姐さん)たちであったということです。天に登れば影の外交官、地に御落つれば巷の女までいたようです。遊郭に似合わぬ厳かな威厳のある屋号・商号には、支那風、薩摩風、琉球風と面白さと悲しさが浮かんできます。昔の琉球国の人々の苦勞を見る思いです。

◎小さかったころ、お姐さん方と一緒に、小学生の教科書で「イロハ」から習いました。

上原栄子著<辻の花ーくるわのおんなたち>

◎著者のお姐さん、占い師による治療のことが書いてある。今から百年前の沖縄で日常的に行われていた祈禱師占い師による病気の治療、これを思い出した体験談として書いておられる。占い師を「マブヤ」と書いておられるが、ネットでは出てこない。ノロなら知っている調べ、おおよそのことがわかった。ノロは、琉球王朝時代に王府から任命された神女。神人（かみんちゅ）・祝女・奴留とも書く。昔は村の祭祀を担当した公務員的存在だった。血筋家柄が重んじられ、実際の発信能力は薄いかも知れない。ニライカナイの神々や、地域の守護神と交信する。それに比べ、ユタは、血筋や家柄に関係なく、能力があればできる個人事業主。交信する対象は祖先の霊や人間の魂。ユタは東北のイタコ、その他の巫女と並んで、シューマン的職能者であった。先日来、沖縄・奄美の民俗学の中で出てきていたのは、ユタのことだと思われる。このユタも現代では、町の占い師に変身して活躍しておられるようだ。

◎昔の沖縄では、子供らが元気なく、ぽか～んとしている時や大人でも気力をなくしている時、また長患いをしている人などに「マブヤーヌ ウティトーン（魂が脱け落ちている）」といて、「マブヤーグミー」魂が抜け落ちている現象と言われていた。子どもころのわたくしは、よく「マブヤー」を落として歩いていると言われていました。支那から伝えられた風習だと思われます。

◎人は、生氣とか魂とかを、道端や墓場の入り口などに落とすことがあり、その生氣や魂が、帰るところを見失ってさ迷うと信じられていたのです。

◎子どもころ、ちょっと大声を出されても飛び上がってしまう、泣き虫で、おだててもただオロオロするばかりの、箸にも棒にも掛からぬ涙垂れワツパと言われていました。真っ暗な夜のお使いが一番苦手でした。角から黒い着物がにゅうっと出てきたりしたときにはもう大変でした。幽霊のことで脅されていたので、黒い着物の人に出会うと、「幽霊が出た～」とばかりに、心の臓を波打たせ、つま先から頭の芯までキーンと音が鳴り響き、ガクガクブルブル、まるで中風にかかったおばあさんみたいになってしまいました。2.3日は、ぽか～んと食事もとれないありさまです。餓鬼猫童が食物を口に失くなるからおおごとです。抱親様（アンマー）は早速、「マブヤ・ハンシー（魂を連れ戻すおばさん）」の家に私を連れていきました。

◎その家は四畳ぐらいの狭い陰気な部屋のなかで、盲目のため、白眼を出しあらぬ方向を見つめているこのハンシーは、生きていうよりも年老いて痩せ枯れているとしか思いようがありませんでした。手の皮がヨレヨレになって垂れさがっていて、手の甲から腕にかけて、丸や四角や矢羽根のような模様の濃い紫色の入れ墨がやはり垂れ下がっていました。これが気味悪く、あたかも私に向かって迫ってくるような感じで、しまいにはハンシーのヒヤッとした氷のような冷たい手が、私の手を取ってそろりそろりと脈を探るのです。この気持ちの悪いことと言ったらありません。手の甲や腕の入れ墨が、まるで黒光りする蛇のように、身体中をはいずり回るので、一瞬ゾオ～としたものです。今思い出しても背筋が寒くなるほど気持ちの悪いものでした。「このワラビのヤブマーは 北から北北東に落ちている」と占いました。

◎数日後準備万端整えて待つておりますと、気味の悪いハンシー殿は、迎えの車に乗っていても荘厳にご入場あそばしました。相変わらず白眼であらぬ方向見つめたハンシー殿は、「・・・生氣がお前を待ち焦がれている」と言いながら、手探りで私の腕をつかみ、飯を盛ったお膳の前に座らせました。そしてハンシー殿は足元もおぼつかなく、お姐さんに手を取られながらよろよろと歩き出しました。お姐さんは私の着物を持ちハンシー殿の手をひいて、おばあさんの言う方角の四つ角で私の魂を連れ戻しに行きました。線香に火をつけ私の着物を広げ私の魂を包み抱きかかえました。お姐さん方が玄関で、「早く入って来なさい ごはんも用意してあるよ」と魂を呼び込みました。用意された食事をががつ食べている私に、ハンシー殿は茶碗に入れてある神聖な水を、指の先で額につけようとしてました。額のつもりだったので、目の不自由なことだったので、目やら鼻やら顔全体にさんざんになでつけられました。翌日から私はとても元気になりました。